

## 吉田初三郎鳥瞰図にみる地方の都市計画

－宮崎県延岡市が描かれた鳥瞰図をめぐって－

山内 利秋 増田 豪\* 益田 啓一郎\*\*

Regional urban planning in bird's-eye view pictures by Yoshida, Hatsusaburo

－ Pictures of Nobeoka City, Miyazaki Prefecture －

Toshiaki YAMAUCHI Go MASUDA\* Keiichiro MASUDA\*\*

### Abstract

Yoshida Hatsusaburo was a designer of bird's-eye view pictures and he produced whole country. There are picture which he drew in Miyazaki prefecture.

Three pictures which Nobeoka city, Miyazaki was drawn on as the subject in that exist, and, after "Nobeoka Meisho Zue (Pictorial Nobeoka)" of 1922, "Nobeoka" of the "Tetsudo Ryoko^ Annai (A guide book for rail travel )" inside in 1923 and World War II, "Nobeoka-shi cho^kanzu (A bird's-eye view picture of Nobeoka City)" in 1952 which this.

From these documents, as well as the figure of cities throughout Japan by the point of view of Mr. Hatsusaburo, it suggests the idea of regional cities in this period for "town planning"

**Key words** : Yoshida Hatsusaburo, bird's-eye view, culture resource, city planning, sightseeing, post-war reconstruction

**キーワード** : 吉田初三郎 鳥瞰図 文化資源 都市計画 観光 戦後復興

### はじめに：初三郎鳥瞰図から地方都市を読み解く

日本各地の都市を鳥瞰図として描いた吉田初三郎の作品には、それぞれの都市をある目的を持った視点から描き出そうとした意図があったと考えられる。これは描かれた都市と周辺の地形について、いくつかの種類化されるデフォルメ手法から認識するだけでなく、図の中に一つ一つ描かれている名勝や建造物の位置付けを確認していく事からも理解出来る。

多くの場合それは、観光目的のような、鳥瞰図の依頼者の要望を取り込んだものである。初三郎が商業画家と

して活躍し始めた頃からの重要なクライアントであった京阪電鉄や鉄道省・大阪商船、さらには盟友と呼ばれた別府の油屋熊八<sup>(註1)</sup>らは、一定の規格化がなされている初三郎の鳥瞰図に様々なリクエストを依頼し、初三郎自身もそれに加えたアイデアを持って鳥瞰図をデザインしていった。

こうしたクライアントの要望を広告に近いかたちで地図デザインに取り入れる手法は、初三郎の制作初期から実施されている。しかし、このような手法は彼のみならず同時代に制作されていた『大日本職業別明細図』（通称、商工地図）のような民間の商業用地図においても多少な

九州保健福祉大学社会薬学部動物生命薬科学科 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

\*延岡市内藤記念館 〒882-0811 宮崎県延岡市天神小路255-1

\*\*アソシエ地図の資料館 〒812-0007 福岡市博多区東比恵4-2-29-401

Department of Animal Pharmaceutical Science, School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare  
1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka-city, Miyazaki, 882-8508, Japan

\*Naito Memorial Museum in City of Nobeoka  
255-1 Tenjinkoji, Nobeoka-shi, Miyazaki, 882-0811, Japan

\*\*asocie.jp / Map Communications Museum

4-2-29-401 Higashihiie, Hakata-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka, 812-0007, Japan

りとも実施されていた。しかしながら、商工地図のクライアントが広告主としての意味合いが強く、大小規模に関わらず複数多様であるのに対して、初三郎鳥瞰図の場合クライアントは単独であったり一ヶ所が取りまとめたりしている事が多い。実際、描かれた鳥瞰図には自治体や商業・観光に関わる団体、大企業が依頼主となってそれぞれの都市のランドマークを選択し、描かれている様子がうかがえる。こうした地図デザインは今日でも行われている観光や商業を目的とした地図作成と基本的には違いはない。

また、初三郎鳥瞰図からは描かれた時代における依頼者の意図と該期の都市に関する様々な政策や諸活動、現代の言葉で言うならば「まちづくり」への視点が伺われる点を指摘出来る。ここにも目的によって描かれた場の表現方法の違いがあらわれていると言えるだろう。

なかでも名所・旧跡の紹介と宿泊機関の明示、そして都市部からのアクセスを可能とする交通機関を描いたその一方で、交流人口増加を目論んだ観光広報目的の鳥瞰図は初三郎の作品の中では多い。その他初三郎鳥瞰図には観光広報とは異なった視点を持った作品も多い。例えば原子爆弾投下直後の広島市の様子を描いた『広島原爆之図』はそうした中でも特異なものであるが、特に第二次大戦後の復興期において各地の都市計画を視覚化した鳥瞰図は、情報伝達（特に視覚的な情報伝達）手法が限定されていた当時においては優れた効果を持っていたと解釈されよう。

ある特定の都市を異なった目的で鳥瞰図として描いた場合においては、初三郎鳥瞰図にはどのような視点の違いが生じているか。このような点については、定点的に描かれた同一の都市を確認していく事によって、明らかにする事が可能となると言えるだろう。

そこで本論では、第2次世界大戦を挟んだ30年という時間的な間隔での比較が可能である地方都市、宮崎県延岡市において、それぞれの時代での都市計画・まちづくりが初三郎鳥瞰図にどのように反映されていたのかを考察していく。

なお、本文は執筆者3人で協議の上、山内が纏めている。

## 1 : 大正期の延岡の鳥瞰図

吉田初三郎の鳥瞰図に描かれた都市は、大都市ばかりではなく中小規模の都市が対象となっている事も多く、もちろん九州地方もここには含まれている。

宮崎県内では宮崎市・延岡市・都城市・日向市・日南市・

高千穂町が作品制作の対象となっている。延岡市が主題として描かれた鳥瞰図は大正12(1923)年の『延岡名所図絵』と翌年の『鉄道旅行案内』中の「延岡」、そして第2次大戦後の昭和27(1952)年の『延岡市鳥瞰図』(原画、延岡市内藤記念館所蔵)の3点である。これらの資料は第2次大戦を挟んだ前後の時代が描画された、地方都市の定点的な記録としての重要性が高い。ここでは、それぞれの鳥瞰図の作成の経緯についてみていきたい。

大正・昭和初期において初三郎が評価された最も大きな要因として、近代的な公共交通の拡張に伴って交通運輸業界が推進した観光のPRに適した優れた作品を注文に応じて制作出来たという側面が挙げられる。初三郎の特徴的な描画手法についてはいくつか研究があるが、フィッシュアイレンズで撮影されたような歪んだ広い画角の中に、縦に引き伸ばされたようにデフォルメされた山川、鉄道と航路、点在する名所・建造物、さらにはこれらに添付された名称を示すキャプションは、カラフルな風景に添付された浮世絵の文字書きをイメージさせる。

ところで延岡を対象とした大正期に描かれた2点の鳥瞰図の経緯については、印刷された鳥瞰図の裏書きや、当時の新聞記事が詳しい。また、初三郎はこれら自らの動向が掲載された記事をスクラップとして整理して遺しており、現在この資料の複製が刊行されている<sup>(註2)</sup>。

大分・宮崎両県を取材した際の記事も福岡県の『福岡日日新聞』や大分県の『豊州新報』・『大分新聞』、さらには宮崎県延岡町(当時)で発行されていた『延岡新聞』等がまとめられている。明治39(1906)年の鉄道国有化法施行に伴い各地の民有鉄道の国有化がはかられたが、それと前後して鉄道省も沿線ガイドブックの刊行を開始する。記事はこうしたガイドブック取材に関係する。

東京駅が開業した大正3(1914)年から刊行された『鉄道旅行案内』は、日本各地の省線(国鉄)沿線の名所旧跡を取り上げ旅行者の便を図ったものであるが、鉄道網の普及が全国的に広まっていく過程においては、私有鉄道の国有化や路線の延伸が相次ぎ、毎年版を重ねて細部を変更していく必要性が多かった(平田2012, p.514~516)。

この『鉄道旅行案内』は、大正10(1921)年版の刊行に際して大幅な変更が加えられている<sup>(註3)</sup>。それは初三郎の登用によって版が縦組から横組になり、初三郎の見開きの鳥瞰図を含めた挿図が加えられるなど、ビジュアル面が強化された事である。平田が述べているように鉄道延伸が進行したこの時期には版毎に改変が相次ぎ、大正13年版には東九州を走る日豊本線も加わっている。初

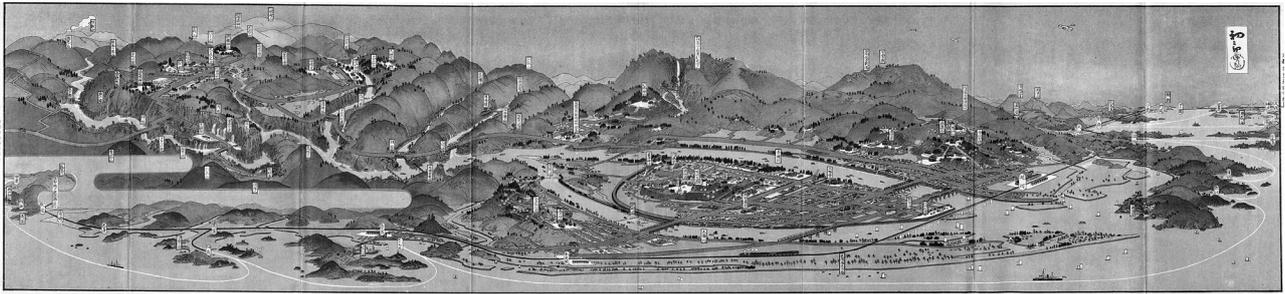


写真1 『延岡名所図絵』(大正12年、印刷折本)

三郎が大分－宮崎方面を訪れたのはその前年、日豊本線が延岡で接続し、宮崎まで開通した大正12年の事であった。

「今回描かうとするものは今春鉄道省から出した全国鉄道俯瞰図に対し国有鉄道を中心とせず民間の電車汽船をも加えて旅行案内を出せとの希望があり鉄道省でも全国を東北東州中部九州と云ふ様に区分したものを発行する事となり私に其の製作の命令があったので其一部の準備として別府附近耶馬溪瀬戸内海朝鮮を研究し西は大阿蘇より温泉嶽南は石仏地帯より宮崎の一部を見せた交通機関名勝古蹟を主眼とするものを描く心算である此方には後藤勇吉氏が時々飛んで来るさうであるからそれに乗って所謂垂直の眺めをしたらと思つて居るが今はそれもどうかと思ふので茲二三日は名勝古蹟を研究し由布にも登つて別府を俯瞰したいと思つている云々」(『大分新聞』大正12年8月16日)

この『大分新聞』の引用箇所からは、未だ船舶による移動が旅客輸送でも重要視されている一方で、鉄道、さらには航空機といった新しい交通機関の勃興を想像させる。後藤勇吉は延岡出身の民間航空黎明期の飛行士であり、パイロットとして名声を轟かせていた。この時期、後藤は大正11(1922)年に岐阜県各務原飛行場から東京代々木練兵場まで日本初の旅客輸送飛行を実施した。さらに翌年4月、大阪－松山－別府航路開拓を兼ねて、宮崎と延岡で郷土訪問飛行を行っている<sup>註4</sup>(吉田1996, p.62～97)(延岡市教育委員会文化課2006, p.6・12・13)。ちなみに『延岡名所図絵』には空を飛ぶ単葉機が小さく描かれている。吉田初三郎はこれら新しい交通機関がもたらす速度感や上空からうかがう事によって変化する国土の景観を観るスタイルに関心を示し、その動向をつぶさに把握していたと言えよう。そしてこうした視点から描かれた彼の鳥瞰図は、鉄道が開通し延伸していった事によって広く日本を移動する事が可能となった国民に対し、見聞を広め、個々人の世界観の再構築を果たしていくのに大きな役割があった。

民間主体で各地に敷設されていった我が国の鉄道は、

日露戦争後に支配下となった大陸・朝鮮半島での鉄道経営との一体的な運営と軍事輸送強化を求められた結果、明治39(1906)年に鉄道国有法が公布された(原田1993, p.56～64)。これに加えて幹線を延伸した事で、大都市部と地方都市部との交流を強化させ、国内での移動を活発にしていた。一方、近代以前から存在していた船舶による国内航路では、明治期に大規模資本化が進行し、さらに船舶の動力化によって高速化・航続距離の延長が可能となった事によって輸送能力が格段に拡大し、国内外での定期航路が拡張されていく。

大正12(1923)年の『延岡名所図絵』と翌年に刊行された『鉄道旅行案内』中の「延岡」は関係が強く、その構図もほぼ同じである。この経緯は先述した本人の来訪事情からもうかがえる。『延岡名所図絵』は現在では原画の所在が不明であるものの、発行は延岡商工連合会となっており、制作経緯については別府亀の井旅館で書かれ、出版された図の裏書からわかる。

「予嘗て、鐵道省より発行の旅行案内執筆以来、其姉妹編として、全國私設鐵道及び汽船航路、さては町村都市等を中心とせる名所交通鳥瞰図創作に没頭、以て現代日本全國名所圖繪完成の宿望を貫徹し、聊か後世人文史上に益する所有らむ為奮闘の折から、ゆくりなくも今回、東九州日豊本線全線鐵道の開通に當り、延岡町長、同商工會長より切なる懇望を拜し、門生前田虹映其他と共に渡州、親しく實地を踏査寫生するに及んで、予は先づ其餘りに恵まれたる大自然の風光美に、呆然として一驚を喫したのである。」

この鳥瞰図は日向灘方向から俯瞰で全体がまとめられ、中心に旧延岡町である川中地区と延岡城跡のある城山を配し、可愛岳(えのだけ)のある北川村(現延岡市北川地区)から富高(図では「高富」と誤記)・美々津(双方とも現日向市)方面、紙幅上部左側にあたる山間部は三田井・岩戸(現高千穂町)方面を主体に、宮崎・霧島方面や阪神方面といった遙か遠方まで含めた初三郎鳥瞰図独特の図法で描かれている(写真1)。赤い線で引かれた鉄道路線は大阪・神戸駅を發し、関門海峡を挟んで門

司(現、門司港)・小倉駅から別府・大分・佐伯駅を通過して延岡駅に到る。さらに延岡・南延岡駅からは富高～宮崎駅方面まで延びている。

船舶の航路は関西・四国方面から佐伯-蒲江港を通り、古江-土々呂港に入る。そこからさらに南下して細島-内海-油津港までが描かれている。船をよく観察すると船尾に白地に赤で「大」字が記載されており、これは当時大阪-鹿児島線や大阪-細島線等の定期航路があった大阪商船(現商船三井)所属の船舶であった事を示している。大阪商船は初三郎にとっては有力な支援者であり(湯原編2002, p.74~77)、この事がこうした表現につながっていると言える。

道路については近世城下町以来の延岡市街地での道路網が描かれていて、かつてのメインストリートである南町通りや中町通りから延岡城跡(城山公園)天守台を斜めに見上げた景観を意識した、近世都市計画における軸線が存在していた事が理解出来る。また、開業して日が浅い延岡駅から五ヶ瀬川の北を走る往還道(現国道218号線)を通して高千穂方面へ抜ける道路や延岡駅にもバスを描く事で、鉄道駅からの自動車での移動を理解させる一種の記号となっている。

こうした交通網の描写については、『延岡名所図絵』の制作と同時期に取材旅行が行われ、翌年に宮内省に納められた『高千穂名所図絵』(宮内庁三の丸尚蔵館蔵、1924年)と比較すると興味深い。

高千穂の景観を視点の主眼とし、紙幅の右下側に描かれた日向灘・本州の都市から海路・陸路を使って延岡の町へ、そしてさらに左上側に配された高千穂の町並みへと視線の移動を意図して描かれていて、土々呂港には『延岡名所図絵』と同じく、大阪商船の社旗も描かれている。また延岡から高千穂に到るまでの日向往還を通じて共通したアクセスポイントや個々の名所についても、『延岡名所図絵』で挙げられた場所と多く共通している。言わば『延岡名所図絵』と『高千穂名所図絵』とは表裏一体の関係にあり、この時期の高千穂への観光ルートが、熊本・阿蘇方面からではなく、日向灘・延岡方面からを主眼として考えられているのがよく理解出来る。堀田典裕はこのような一体的な構図について、「特定の産業に支えられた都市が、山並みによって画面上方から囲い込まれ、この都市と山並みが、さらに水面によって画面下方から囲い込まれるという「入れ子」の構図によって描かれ、都市空間は単独で切り離されているのではなく、「自然に囲まれた小さなひとまとまりの「郷土」として認識されている」と言っている(堀田2009, p.103~113)。これは高千穂方面から観るならば、延岡は天岩戸や高天原と

いった皇祖発祥地としての高千穂との一体性の中で、外部へ開かれていった新しい都市というイメージを喚起させたものであった。こうした認識は、初三郎も大きく関与していた大正末期から昭和初期にかけて各地の名所を聖跡として評価していく機運やそのプロセスと共通する。

しかしながら、延岡はこの鳥瞰図が描かれた直後に東シナ海側の熊本・鹿児島県に工場があった日本窒素が、太平洋側の城下町の名残を遺していた延岡に進出する事によって、工場の周辺に市街地が形成される等工業都市へと大きな変貌を遂げる(写真2)。そうした点からすると、この鳥瞰図は一都市の工業化がはじまる直前の姿であり、タイトル通り知られざる名所を評価し、内外に知らしめる事に主眼が置かれた作品である。

延岡町はその後、日本窒素の進出を踏まえて工場を誘致した隣接する岡富村・恒富村の隣接2村と昭和5(1935)年に合併し、昭和8(1933)年から市政を施行した。そしてこの翌年度には、国道3号線(後の10号線)の板田橋・安賀多橋が内務省直轄事業で木製からコンク



2-1: 日豊本線開通直後の延岡-南延岡駅間の様子、日本窒素工場がまだなく田園地帯が広がっている。



2-2: 工場以前の名残をのこす延岡市別府(びゅう)町の用水路。平成22年10月撮影、2-1の列車が交差している附近にあたる。

写真2: 日本窒素の進出と延岡

リートの永久橋へと架け換わる事となり、これを機運として市内中心部で各地区の地権者達が6つの事業組合を立ち上げて、土地区画整理事業を実施している(延岡市史編さん委員会1983, p.508~514)。この区画整理は「事業方針に従って各組合毎に計画を決めて工事を進めたので、整然とした道路網によって町なみが整い、店舗が建ち並び近代的な都市形態が整った」(同p.510)。さらに延岡駅も昭和10年の行幸を契機に周辺整備がなされ、都市としての風格を備えた街並みが整ったのであった。

## 2：『延岡名所図絵』にみる制作視点

先に『延岡名所図絵』と『高千穂名所図絵』との関係性について考察したが、大正期に『延岡名所図絵』が企画された当時、延岡を観光地として位置付けるという認識は果たしてどの程度存在したのだろうか。当該図裏書の記述や『鉄道旅行案内』等の旅行案内での紹介、さらには延岡当地で書かれた書籍の記載を確認してみよう。

まず『鉄道旅行案内』であるが、これは全国の鉄道路線を網羅したもので沿線個々の案内は概略にとどまっているものの、延岡の項には以下の通りの記載がある。

「【延岡】(のべおか) 一五八哩八 五箇瀬川の末東海灣頭に在り、内藤氏七萬石の舊城下、城址は町の西方に高く聳えて鳥観に富む、名物破れ饅頭、旅館吉野家、菊池 ▼岩戸神社、西十六里、自動車三田井まで四圓八十銭、四時間、三田井からは俵七十五銭、社は天照大神を祀り、神代史の大神隠れませし天ノ岩戸は此処だと傳えて居る。附近には蝙蝠岩の奇勝がある ▼行膝の瀑布、北西三里、馬車七十五銭、高さ十八丈、山に秘密岩屋と云う洞窟あり」(鉄道省1924, p.213)

短い記述ながらも、ここには同『案内』の鳥瞰図と、原画の近い『延岡名所図絵』で図示されている延岡市街地から遠く高千穂までの景観と交通が記載されている。次に紹介された名所について『図絵』の裏書から確認してみたい(表1)。両者の情報量に大きな差があるものの合致する名所は少なく、また『案内』には書かれている名物や旅館が『図絵』には全く記載されていない点の特徴的とも言える。風土食・土産ともなる名物や宿泊施設である旅館の情報は、『案内』中では他の土地や路線にも共通して記される内容であり、これは巻頭の営業案内、巻末の鉄道省線と私鉄・軽便鉄道等との乗換案内や運賃表とともに、鉄道旅行ガイドブックとしての基本情報を意識して掲載されたものと考えられる。

表1：大正期の延岡の鳥瞰図に記載された名所

案内文のある名所	場所	鉄道旅行案内	名所図絵
延岡町	延岡	○	○
城跡・城山	延岡	○	○
破れ饅頭	延岡	○	
旅館吉野家	延岡	○	
旅館菊池	延岡	○	
天岩戸神社	高千穂	○	○
行膝山・瀑布	延岡	○	○
延岡遊船	延岡		○
今山八幡神社	延岡		○
今山公園	延岡		○
今山大師堂	延岡		○
台雲寺	延岡		○
亀井神社	延岡		○
春日神社	延岡		○
愛宕公園	延岡		○
開山堂	延岡		○
長濱海水浴場	延岡		○
須崎公園	延岡		○
新市街(須崎町)	延岡		○
東海港	延岡		○
可愛岳	延岡		○
俵野御陵	延岡		○
土々呂港	延岡		○
三松公園	延岡		○
細島港	日向		○
僧胤康の墓	延岡		○
横峰鉦山工場所在地	延岡		○
オノコロが瀧	高千穂		○
篝渡橋	高千穂		○
高千穂	高千穂		○
高天原	高千穂		○
樓觸(くしふる)神社	高千穂		○
天香久山	高千穂		○
高山短山	高千穂		○
神代川	高千穂		○
天ノ真名井	高千穂		○
四天王寺峰	高千穂		○
高千穂神社	高千穂		○
忍穂井	高千穂		○
七ツが池	高千穂		○
御橋	高千穂		○
稜威ヶ淵	高千穂		○
神橋	高千穂		○
窓の瀬	高千穂		○
七本杉	高千穂		○
天安河	高千穂		○
神楽尾	高千穂		○

一方で『延岡名所図絵』に記載されている名所案内の項目は、旅行者が延岡に到着し、鉄道駅や港から広がる街と高千穂の山々を眺望した際に有用とされる事をイメージした、土地の付加情報に他ならない。そして実は、延岡の中心地である川中地区（昭和5年合併前の延岡町）の名所は裏書では必ずしも多く紹介されていない。

これは絵図表面に添付されているキャプションについても同様であって、川中地区に集中する町役場・裁判所といった官公庁や延岡劇場（東雲座）・須崎温泉等の施設は図上には目立つ建物として描かれてはいるものの、説明が一切ないのが特徴的である。

なお、名所・旧跡を産業・商業等と基本的に分離するという類型化は、同時代の延岡在の知識人によって纏められた地誌の記載とも一致している。盲学校「延岡訓盲学舎」を開いた山口徳之助が、日本窒素が工場を開設した後の大正15（1925）年3月に執筆した『延岡大観』（山口1926）や、同年12月に延岡商工会議所の有力メンバーであった塩伝次郎が宮本啓介とともに纏めた『新撰 大延岡案内』（宮本・塩1926）も、内容に違いはあるものの同様の構成になっている<sup>（註5）</sup>。しかしながら、『図絵』と異なるのはこれらの書籍が紹介しているのはあくまでも延岡と隣接村の地誌・官公庁や商業・風俗・神話伝承・名所旧跡等であって、高千穂地方を含んでいる訳ではない。これは何故か。

高千穂は幕藩体制下において延岡藩領として組み込まれ、明治期になっては臼杵郡として行政的には一括されていた地域であると言える。ところが明治22（1888）年に延岡町を中心とした海岸部に近い自治体が東臼杵郡、高千穂を中心とした山間部自治体が西臼杵郡として分割される事となる。しかしながらこの新しい行政的な区分に対して明治・大正期の延岡の人々には異なった文化的な背景を持ち、しかも延岡という土地の周縁にありながらも、かつての藩、さらには東西に分割される以前の臼杵郡としての高千穂地方との一体性に、意識的・感覚的な拘束があった可能性がある。これについて、『延岡大観』の「はしがき」には興味深い記述がある。

「尚ほ本書中、郡内著名の名勝旧跡や変わった事項を併せ記したのは、附近の繁栄は同時に、中心地たる延岡の繁栄と解したからである。此の意味から、高千穂の名勝旧跡なども紹介する筈であったが、材料の蒐集、思ふに委せなかつたので、後日改版の期を俟つこととした。」（山口1926, p. 4）

一方で『新撰 大延岡案内』では、延岡を歴史・産業・商業等の集積した一つの都市として扱い、昭和に入ってから合併した岡富・恒富村と4つの村部（伊形・東海・

南方・南浦）、さらに隣接している三北（さんきた）と呼ばれる3つの村（北方・北川・北浦）と、それ以外とを切り離している。これは現在の延岡市域と東西臼杵郡域との行政区分にも合致しているが、近代産業都市としての「延岡」の領域が、意識上でも確立しつつある時代であった事を示すものとも言えよう。特に商工会議所の中核でもあった『新撰 大延岡案内』の作者達にとっては、日本窒素工場の開設を契機とした地域産業・商業の一体化が念頭にあったと考えられる。

さらに観光戦略という側面から考えるのならば、一つの土地を広域性の中に置いて文化や歴史等の関連性から広い範囲で移動させる事に力点を置かせるのか、それとも現代の言葉で言う着地型観光に近い、地方都市として単独の存在と位置付けて市街地を中核とした重点的な巡回を想定させるかの違いがあったとも考えられる。しかしながら『延岡名所図絵』が高千穂を延岡との関係性において描き出し、そして記述しているのは近代高度産業化の直前の時代である。そのような点からすると初三郎という外部性は、クライアントの意向を考慮する必要はあるものの、延岡のアイデンティティの評価として、高千穂との一体性を意識していたと位置付ける事が出来るだろう。

### 3：昭和戦後期の鳥瞰図

大正12年に日豊本線が全通し、その前年隣接する延岡駅・南延岡駅の2駅が開業した経緯には日本窒素の進出が大きく関わっていると推測されるが（山内2013, p.103～113）、『延岡名所図絵』の裏書にはまだこの記載はなく、時期的に開業直前であった事が理解される。一方で、名所として描かれた工業関連の施設として槇峰鉦山がある。裏書には「日平、見立等名鉦少なからず延岡より五ヶ瀬川の上流に添ふて無限の溪谷美を賞しつつオノコロが瀧の壯観を」と記載され、あくまでもその景観美が評価されている。

また、川中地区と呼ばれる延岡市中心部のうち、中洲の東端部の須崎町は大正末期から昭和初期にかけて間野虎次郎によって開発が進み、新市街と呼ばれていたが、これについては「洲崎（ママ）一帯を埋立土地高操 延岡第一等の中心として発展するの場所、今や着々成功せり、而も風光絶佳にして地の利極めて優秀である」と紹介されている。

表2：鳥瞰図の「文字書」の対比

	延岡名所図絵	延岡市鳥瞰図
延岡市内	東海港、邇邇芸古墳伝説地、今山公園、八幡神社、蓬萊山、須崎公園、新市街、台雲寺、可愛岳、西南古戦場、長濱海浜浴場、三福寺、五ヶ瀬川、無妙専寺、大瀬川、城山公園、九州第一ノ名勝むかばき、動物園、内藤家、亀井神社、延岡築、行勝神社、日本武尊熊襲御征伐ノ御遺跡、春日神社、吉野築、愛宕山公園、比叡山、菅原変電所、僧胤康遺跡、日平鉾山、横峰鉾山、三松公園	可愛嶽、高島、島野浦島、鏡山、西南役趾和田越、川島小学校、川島橋、東海小学校、東海中学校、祝子橋、旭化成ダイナマイト工場、港小学校、北川、旭化成レイヨン工場、旭有機工場、旭化成二硫化工場レイヨン寄宿舍、黒岩学校、祝子分牧場、小山橋、祝子川、日豊汽船棧橋、海水浴場、方財島、方財小学校旭小学校、宮崎交通、総合グランド予定地、鷺島、導流堤、観光ホテル(予定地)、長浜海岸、保育園、今山大師、蓬萊山、大和銀行、五箇瀬橋、岡富小学校、公園墓地、板田橋、比叡山、祖母山、矢崎嶽、行勝神社、亀井橋、市営アパート、大瀬川、延岡中学校、東小学校、須崎橋、大分合同銀行、鹿児島銀行、五箇瀬川、舞野、九州配電、税務署、郵便局、電話局、市警察署、法務局、市役所、日向興銀、商工会議所、立野、国家警察署、連絡事務所、裁判所、検察所、安賀多橋、ペンベルグ寄宿舍、岡富中学校、松尾城趾、延岡小学校、放送局、西延岡、亀井神社、専売公社、旭化成ペンベルグ工場、旭化成雷管工場、旭化成プラスチック工場、テニスコート、向陽クラブ、旭化成中央事務所、プール、大瀬橋、延岡保健所、西階城趾、国立公園雲仙岳、天草島、三須、鮎の築、恒富小学校、旭化成薬品工場、県立病院、市営アパート、旭化成恒安寮、雷管社宅、緑ヶ丘社宅、向洋高等学校、南中学校、延岡競馬場、南小学校、恒富神社、恒富高等学校、井上城趾、土々呂中学校、土々呂小学校、海水浴場、名水小学校、魚見山、鯛大敷網漁場
日之影町	築崎、見立鉾山、五ヶ瀬発電所、日影	日之影
高千穂地方(他の宮崎県北山間部を含む)	大神宮、天の岩戸、天の浮橋、をのころが滝、賽の河原窟、篝渡橋、神楽尾、烏帽子岳、四皇子ヶ峰、熊初溪、祖母山、諸塚山、高天ヶ原、日影、天香山、祖母ヶ岳神社、八重雲ノ滝、穂觸(くしふる)神社、月形、三田井町、天の真名井、ひく山、二上山、忍穂井、高山、郡役所、公園、稜威ヶ淵、さきりの滝、神橋、高千穂神社、きつの宮、高千穂城跡、愛宕山、鬼の滝、窓ヶ淵、国見ヶ岳、熊本二至ル	三田井町
熊本方面	阿蘇山	高森
門川・日向	伊勢ヶ浜	門川、日向市、細島
その他宮崎県内	霧島山、青島、鶴戸神宮	都城、青島、鶴戸神宮、鹿児島、国立公園霧島
鉄道駅	大阪、神戸、宮島、下関、門司、小倉、別府、大分、佐伯、延岡、南延岡、土々呂、富高、細島、美々津、宮崎、大淀、吉松ヲ経テ鹿児島ニ至ル	東京、下関、門司、福岡、大分、延岡、南延岡、土々呂、宮崎、熊本
港湾	高松、高浜、宇和島、蒲江、古江、ととろ港、内海、油津	宮野浦、市振、古江、熊野江、浦尻、神戸
その他名所	瀬戸内海、朝鮮、耶馬溪、鶴見山、豊後富士、由布院温泉、	

このように、大正期の『延岡名所図絵』では工業関連施設や都市計画に関わる地所も、優れた景観美を有する名所として取り上げられていた所に特徴がある。さらに、これら名所は従前からの自然環境や歴史性を有した場所では必ずしもなかった点も着目されるべきであろう。また、大正期の『図絵』は注目されるべき場所を「名所」という表現で分類していたが、別の時代に描かれた図では異なった表現がなされている点も指摘する事が出来る。

延岡を描いた初三郎の鳥瞰図は第2次大戦後の昭和27(1952)年にも作成されている(写真3)。この『延岡市鳥瞰図』は大正期の『図絵』と殆ど同じ構図であるが、わずかに角度を変化させる事で山間部を隠し、これによってかつて一体的に扱われていた高千穂を切り離し、観光

視点よりも戦後の都市延岡の発展を主眼に置いて構成されている。これは2枚の鳥瞰図のキャプション-文字書きを比較すると極めてよく理解出来る(表2)。

実はこの間、昭和7(1932)年と昭和10(1935)年にこの2枚の鳥瞰図とほぼ同じ日向灘方面から海を下・山を上配置した構図の鳥瞰図が描かれている。昭和7年の鳥瞰図は木村好兵衛によって編纂された『大延岡の展望』の一部で、下部が「延岡市街地図」と題された平面図になっており、これを補うように上部が鳥瞰図になっている。さらに昭和10年の『伸び行く延岡市鳥瞰図』は初三郎の下を離反した金子常光によって描かれたものであるが、いずれも遠景の高千穂を含めて『延岡名所図絵』をベースとして作成している事がよく解る。



写真3：『延岡市鳥瞰図』（昭和27年、絹本着色、延岡市内藤記念館蔵）

第2次大戦末期に都市中心部を空襲によって焼失した延岡の街は、戦後直ぐに旭化成において大量の雇用があり、日本窒素<sup>(註6)</sup>の関連会社である朝鮮窒素へ出向・関係していた人々をはじめ、中国大陸・南洋諸島からの引揚者も多かった事から、著しい人口増加期が訪れる。これは日本のいくつかの都市で同様の状況があったが、そうした結果発生したのが住宅難であり、さらに実際には旭化成でも全ての人々を雇用出来た訳ではなく、失業者問題も発生している。昭和23(1948)年に発生した旭化成の労働争議は、労働者の雇用条件・福利厚生の問題を物語るが、一方でこの頃から街中ではダンスホールなどのアメリカ文化の影響を受けた盛り場が形成され、特需景気を境に商店街などの商業活動が活発になる。特徴的なのは戦時中は供出されていた金属が戦後復興とともに余剰が出た事で街中でも利用されるようになった点であり、祇園町銀天街の銀天の名の由来となった片側のシルバーアーケード(金属製アーケード)は、昭和27年~28年に設置されている<sup>(註7)</sup>。

このような時期の鳥瞰図からは、復興を遂げつつある当時の地方都市の様子が観てとれる。『延岡市鳥瞰図』に描かれているのは、旭化成関連工場や行政機関・鉄道駅舎さらには公共住宅や市場といった公共性の高い建築物、また橋梁・交差点・商店街のような都市としての機能を果たす場であり、大正期の『図絵』とは描き込まれ

ている対象が明らかに変化している。

昭和27(1952)年、吉田初三郎は延岡市鳥瞰図の作成に際し大正期以来の延岡の取材を行い、多くの写真を遺している<sup>(註8)</sup>。ただしこの時期、初三郎本人は既に体が弱っており、実際には弟子によって撮影・記録され、制作も二代目初三郎こと吉田朝太郎が中心になったと考えられる。しかしながら実際に写真と鳥瞰図に描かれた個々の建造物や景観を比較すると、市内の代表的な景観や公共性の高い建築が撮影対象となっており、写真に記録された像が図に反映されている事が理解出来る。中でも特に中心的に描かれている建築が、昭和25(1950)年に建設され、当時九州地方でも数の限られていたRC造の公営住宅(標準設計49B型と呼ばれる4階建ての集合住宅、平成19年に解体)である(写真4)。この公営住宅(船倉市営住宅)は限定されていた住宅供給不足を解消する目的でつくられたものであるが、市民から名称が募集され「薫風荘」と命名されている<sup>(註9)</sup>。延岡城跡と、昭和26年に建設された延岡消防署火の見櫓を除いては、当時、市街地中心部において最も高い建物であり、復興期の市民にとっては象徴的な住宅建築であった。実際、この建物は鳥瞰図上でも極めて目立った存在として描かれており、また市営住宅屋上から360°周回して周辺の景観を8カットにわけて記録撮影されている事からも(図1)、この建物が延岡市街地におけるランドマーク的な建築として注視されていた事が伺える。

さらに、描かれた鳥瞰図を写真と比較してみると、図上に描かれた建築物の方位は、実際の建物の方位よりもむしろ写真で撮影・記録されたままのフォルムが生かされており、視点を一点に求めない初三郎鳥瞰図での独特な透視図法の特徴をうかがう事が出来る。言ってみればこうした視点は、鳥瞰図でありながらも遠近法で俯瞰したスタンスで全体を見通すだけではなく、街中を歩いて写真を撮影し、その写真を地図に貼り付けるのにも似ており、取材者のマクロな視点において最終的な図を成立させていったものであるとも言えよう。

初三郎の鳥瞰図は描く対象とする地形を極端にデフォ



写真4：船倉市営住宅「薫風荘」（平成19年9月撮影）

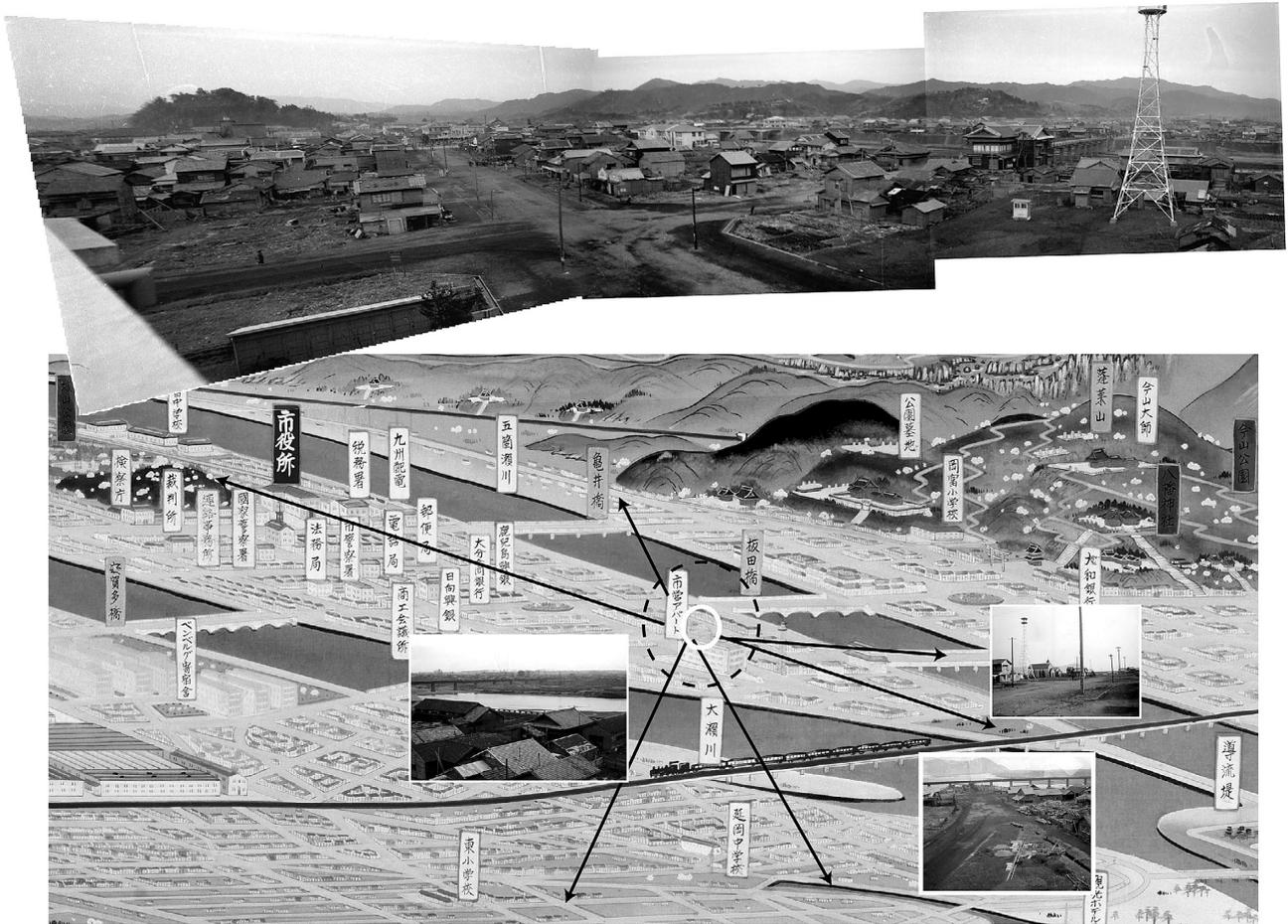


図1：『延岡市鳥瞰図』に描かれた船倉市営住宅と周辺の景観

※上の写真は市営住宅屋上から市役所・城山方面を撮影した写真、3カットを接合している。また、下図に描かれた市営住宅を中心に、矢印のように市街地を360°撮影を行っている。鳥瞰図以外の写真は、アソシエ地図の資料館所蔵。

ルメするのが一つの特徴であるが、個々の建築を大きく描いたり省略したりといった描画法も多く行われている。例えば延岡に近い所では昭和2年に油屋熊八の亀の井ホテルが刊行した『日本第一の温泉別府亀の井ホテル御案内』に描かれた亀の井ホテルや(名古屋市博物館2014, p.92~101)、昭和13年に霧島神宮四社巡拝事務所が刊行した『祖国めぐり 四神宮巡拝鳥瞰図』に描かれた霧島神宮のような特定の施設を主題とした鳥瞰図の場合に顕著だが、特定の自治体や地域のような一定の広い面積を扱ったタイトルの図でも、同様の手法が採られている場合もある。その一方で、取材写真にも撮影されており、規模的にもそこそこ目立った建築物であっても必ずしも鳥瞰図に描かれている訳ではないケースもある。これは個々の鳥瞰図作成の目的や、デザイン的な位置付けによって加除されていると考えられる。

#### 4：『延岡市鳥瞰図』が制作された意義

延岡は近世城下町ではあるが、昭和8(1933)年以降、幹線道路を中心に大きな区画整理が行われており、細路地のような近世的な都市の有する動線は比較的早く失われていた。また大戦末期の空襲被害、さらに終戦直後に枕崎台風が発生した事によって市内中心部の施設や住宅は壊滅的な被害を受けている。その一方で、空襲を受けたものの早々に再開稼動した大規模な工場施設が市内に存在している事もあり、終戦後比較的早い時期から急激な人口増加がはじまり、それに対応して工場社宅や公営住宅が多く建設されている。そうした中で特に近代的なRC造の市営住宅をはじめとする数々のインフラや、大きな工場を絵図面の中で描き出す事は、発展していく工業都市としての側面を広くアピールしたものであると考えられる。しかしながら、『延岡市鳥瞰図』の取材写真に記録された街並みからは、焼け野原やそれに続いた自

然災害から実際の所完全に復興している訳ではなく、未だ空き地が目立ち、台風によって流された市内を流れる大瀬川にかかる大瀬橋も、描かれた絵とは異なって復旧していない事がわかる。

また鳥瞰図には、実際には存在していない「観光ホテル」等の施設や、板田橋の北側に拡張した道路にはロータリー交差点が描かれている。信号機の不要なロータリー交差点は、我が国においては第二次大戦前後期の地方の都市計画において度々計画されたものの、予想外のモータリゼーションの進行のため大きな渋滞を招く事が多く、その殆どが廃止されている<sup>(註10)</sup>。延岡市では、この鳥瞰図にもある中央通り交差点のロータリーが実際に建設されたものの、やはり渋滞問題に直面し、昭和43年には廃止されている。ところがこの鳥瞰図にみられるように、目抜き通りである国道10号線(戦災復興計画の街路変更により国道3号線から名称変更)では、中央通り以外の祇園町・安賀多町の2ヶ所の交差点でもロータリー建設計画が存在していた。これは戦災復興事業での昭和21年の街路計画(都市計画街路、昭和21年8月19日戦災復興院告示第95号)中の、国道10号線に対し「但し起点附近Ⅱ. 1. 2号線との交会点(祇園町交差点)、Ⅰ. 3. 1号線との交会点(中央通り交差点)及びⅡ. 1. 4号線との交会点(安賀多町交差点)に広場を設ける」との記述からうかがう事が出来るが(建設省編1958, p.699~730、括弧内筆者)、復興土地区画整理設計図にもこのロータリー交差点が描かれている(図2、点線部分)。昭和23年の米軍空撮写真には、既に中央通り交差点のロータリーが確認出来、また、24年に九州通信社から刊行された『新しい延岡の地図』に掲載され復興計画を参考に作成された「延岡市内図」には、3つの交差点にそろってロータリーが描かれている。ところが実際には中央通り以外の他の2ヶ所の交差点では、交差点拡張整備は実施されたものの中央部の円形緑地化は行われず、ロータ



図2：復興計画図中のロータリー交差点  
(建設省1952を改変)



写真5：中央に広い空間のみが存在している祇園町交差点  
(平成26年9月撮影)

リー化は行われなかった(写真5)。

『延岡新聞』(昭和28年2月4日記事「祇園町ロータリーに地元から止めてくれ!!」)によると、同時期に建設されたシルバーアーケードによって確保された動線が、ロータリー建設によって分断される事を嫌った商店主達による反対が相次いでいた事がよくわかる。この時期延岡市内においては商店街振興組合が相次いで設立されており、彼らは地域コミュニティを牽引すると同時に商業振興に影響力を持ち始め、さらに戦後の民主化が地方自治に対する地域住民の関与をも大きくした事もあって、戦時中の反動として国や自治体によるインフラ整備の動向を左右していた。ここから昭和戦後に制作されたこの鳥瞰図は、延岡という都市の近未来の将来構想として描き出したものである事がうかがい知れる。

また一方で、本来この街が持っていた近世城下町としての姿も、鳥瞰図の中に描き出されている。市内の中心部にある城山、すなわち延岡城跡から市街地を見渡した写真が数枚存在しており、この視点でもって街を俯瞰した様子も描かれている。さらに、市内中心部からゆるやかな傾斜を持って城山を見上げる眺望(ピスタライン)も複数カット撮影されており、これが図上にも表現されている事で、街中の景観を美しく描いてみせている。高台にある城跡から眼下の街を俯瞰する構図は有り勝ちだが、広角で広がる街並みは都市計画を肉眼で感覚的に理解する上では最も必要な行為であり、それに応える構図にもなっている。

ところでこの『延岡市鳥瞰図』が企画され、制作された意図とは一体どのようなものなのだろうか。一つには同図の「繪に添へて一筆」に書かれている「講和新中国再建の劈頭、本図を記念出版のこと」という一文の通り、サンフランシスコ講和条約調印後における我が国の政治的動向と当時の国内の高揚、少なくとも繊維産業の輸出

が期待された延岡の経済界にとっては、一方の安全保障の問題よりも期待が高まった事が確かにあろう。昭和26年9月に調印された同条約（昭和27年条約第5号）は、鳥瞰図の刊行された27年の4月から効力が発効した。

そしてもう一つには、この当時の都市計画の動向を確認していく作業が必要となる。延岡は戦災復興計画<sup>(註11)</sup>における特別都市計画法の指定都市となった事により（昭和21年内閣告示第30号）、復興が促進されている。事業は土地区画整理事業・街路事業・河川水路事業・ガス事業・橋梁復旧事業・公共空き地整備事業・失業対策事業の7つが、昭和21年度より5ヶ年をもって実施された（江川編1952, p.263～265）<sup>(註12)</sup>。これは被災した市街地中心部の公有地・商業地・住宅等の区画整理や緑地帯の整備、昭和10年に整備され市街地を南北に縦貫する国道3号線（後の国道10号線、現在の県道16号線）を主幹線道路とした幅員の拡張、さらには多発していた台風災害に対する五ヶ瀬川水系の治水事業が当てはまる。

鳥瞰図が描かれた時期は、こうした戦災復興計画が一段落し、シャープ勧告によって慢性的赤字状態だった地方財源の安定化への見通しが立ちつつあり、また朝鮮特需を経過した事によって建設資材の不足が不完全ながらも解消されつつあり、住宅供給が追いつ追われつしながらも人口が増加している時期にあたる。つまり、鳥瞰図からは復興期から高度成長期前期、特に昭和30年代の「新産業都市」へと発展していく合間の時代の地方都市の姿をみてとれるのである。

『市政要覧』に掲載された昭和24年度から27年度の延岡市の一般会計予算額と地方税収をみると、26年度は一時的に税収が停滞しているものの翌27年度には元の増加傾向へと回復しており、驚異的な増加傾向がうかがえる（延岡市1949, p.72・1950, p.88・1951, p.112・1952, p.20）（図3）。実際、24年度と27年度を比較すると、実に一般会計予算額で3.7倍、地方税収で3.3倍もの伸び率があった。終戦直後のハイパーインフレを経験してもなお、大規模な繊維工場を抱えたこの地方都市の税収と

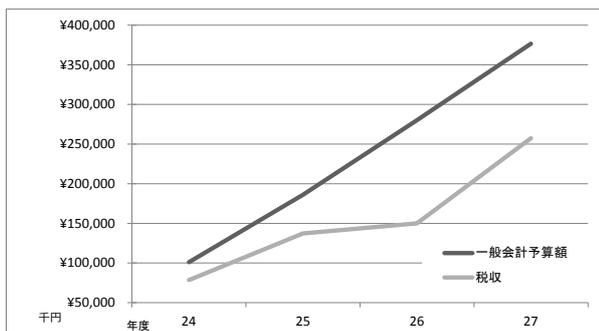


図3：昭和24～27年度の延岡市の税収と一般会計予算額

予算規模の爆発的な伸びは、自治体の政策を戦災復興主体から生産基盤の確立主体へとシフトさせていった事を示している。特に都市計画においては着目すべき動向がある。これは昭和26年度の議会において説明・議論された「モデル都市の構想」（前記江川編1952, p185）や昭和27年の当時の仲田又次郎市長の「財政計画並びに施政方針」の中での「都市計画特定都市の指定」（同, p.209）という発言にある建設省都市局による事業であるが、昭和26年度の延岡市の『事業報告書』では、企画課の項目で次のように触れられている。

#### 企画係

「概要、市政各般の総合企画を行うことを目標として、棧構改革によって新設されたのであるが、当面の問題として本市の特定都市計画のための資料の蒐集、計画の立案に当りつつあり、今後は更に広範囲に亘る市政の企画に邁進したい。」

#### 「1. 特定都市に関すること

昭和二十六年八月延岡市が特定都市として設定せられたるに付、八月二十三日県より関係課長、係員来延、市関係各課長、係市内関係者の参集を得、説明会を開催す爾後企画係に於て関係各課に緊密なる連絡の下に市内各関係方面に強力なる強力を要請、各種調査を着々進行引続き補修的調査を続行中である。」

#### 調査係

「ロ. 建設省都市局「都市計画基礎調査要綱案資料」作成」

（延岡市1952b, p.21・22）

このような企画課の記述からは、事業が旧都市計画法において実施された都市計画基礎調査である事が理解出来る。同調査は、昭和26年度から建設省都市局が担当し、国土再建の見地から新しい都市整備を目指し、適正な市街地規模や都市圏の把握、交通・公園等公共施設の利用調査等を実施したものである（楠瀬1951, p.13～15、1952, p.10～12）。調査対象となったのは、様々な性格を有する代表的な都市が選定され、延岡市を含む全国20都市が対象となっている。

都市計画基礎調査のモデル都市となった事は、市民に対して延岡の近い未来の将来像を描き出す上で大きな意味を持っていた。昭和27年元日の『延岡新聞』では「伸びゆく大延岡 うれしいモデル都市近代的な整備の首途」という見出しでこの事業の重要性について詳細に解説している（『延岡新聞（夕刊）』昭和27年元日）。また、

この解説文中には「航空鳥瞰写真その他の計画図面作成および調査資料などの所用事務費として百万円を計上その一部として二十七万円の国庫補助を受け」という記載があり、さらに記事の上部には市内の愛宕山から市街地を見下ろした写真で紙面が構成されている。写真は新聞写真製版のため網点分解が粗く詳細な確認は難しいものの、撮影はカメラを水平回転して行われ、複数に分割したカットそれぞれの収差の大きい端部を切断して、横長に焼き付けている。また両端部から中央部に向かって分割が細くなっており、これも収差を考慮したものであり、全体的に高い技術を要したものである事がわかる。都市計画には航空写真による測量が実施されるため、この写真は記事文中の鳥瞰写真とは別のものと考えられるが、都市全体を見渡す景観がランドデザインを概観し、説明する上で重要とされていたのである。

初三郎鳥瞰図が昭和27年の段階で延岡において制作されたのは、こうした鳥瞰写真と同様、都市計画の全体像を視覚化し、「近未来の都市、延岡」像を提示する上で必要とされていた背景があった。これは同じく『延岡新聞』（昭和27年10月29日）に掲載された「延岡んとが一番ヨカ！ 大人気のミス・シャンシャン馬」という見出しの記事からも理解出来る。記事には、宮崎市の宮崎神宮の祭礼に協賛して実施された郷土産品商工展に際し、宮崎県内各地の鳥瞰図が展示され、延岡市は他と異なってテープレコーダーの音声で鳥瞰図説明を行った事が好評であったという話が、実際の『延岡市鳥瞰図』の原図が掲示された写真とともに構成されている。初三郎は宮崎県内では『延岡市鳥瞰図』と同時期に、『宮崎市鳥瞰図』（昭和25年）や『都城市鳥瞰図』（昭和26年）『日向市鳥瞰図』（昭和27年）を描いており、記事からはこれらの作品が商工展で一同に展示されたものと推測される。実際の所、都市の発展をテーマにした作品は初三郎鳥瞰図の中では最も多く（益田編2008, p.60~73・2009, p.10~21）、宮崎県内3都市の鳥瞰図も一連の作品群に位置付けられる事が出来る。つまり昭和27年の『延岡市鳥瞰図』は観光用の案内図としてよりも、都市延岡の復興と将来像を産業界をはじめとする、内外の人々に周知する広報の役割を持った広報の役割を担うコンテンツとして制作されたと指摘出来るのである。

## 5 : まとめ

本論では、鳥瞰図画家吉田初三郎が描いた宮崎県延岡市に関わる作品、特に『延岡名所図絵』と『延岡市鳥瞰図』をめぐって、それらが制作された背景と性格を考えてき

た。大正12(1923)年に描かれた『延岡名所図絵』は、大規模工場が進出する直前の時代の作品であり、城下町時代の面影を色濃く遺しながらも船舶・鉄道・自動車といった近代的な交通網の発達を前提とした名所図絵として制作されている。そこには初三郎が意識した、高千穂地方をも含めた地域の一体性も反映されている。一方で昭和27(1952)年の『延岡市鳥瞰図』では、第2次大戦後の戦災復興を終えつつあり、高度成長期における産業都市として躍進する近未来の街の姿が描かれていた。

2枚の鳥瞰図は同じ構図でありながらもその目的を変えつつ、それぞれの時代の一地方都市の姿を内外に知らしめる役割を持って制作されたものであった。初三郎鳥瞰図は、地図でありながら実際にそれを持って歩くと必ずしも正確ではなく、時に道路が省略されたり建物の向きが異なっていたりする。しかしながらそうした描き方が制作的な意図であるのは自明で、この鳥瞰図は緯度を情報として記載する事なく日本列島での特定の土地の位置や距離関係を相対的に把握させ、土地の文化的背景や地区の特徴・性格を一瞥して理解可能なように、周到に描かれているのであった。電子情報化が進行し、GPSと連動した地図が持ち歩かれる世の中になっても初三郎鳥瞰図の魅力が失われないのは<sup>(註13)</sup>、描かれた土地への興味を引き出すために苦心された、初三郎の創造性が時代を超越していたからに他ならないだろう。

## 謝辞

本論summeryの作成においては、藤澤ティファニーさんの御協力を得た。

## 註

- 1 : 油屋熊八は大正期において別府の観光開発に尽力し、温泉ホテル経営やバス会社経営のみならず、卓越したアイデアを持って「地獄めぐり」をはじめとする観光ルート開発や奇抜な宣伝等、様々な活動を行った(三重野2004, p.35~53)。
- 2 : 周宇屋編『吉田初三郎 資料スクラップ集No.1』。なおスクラップ中、初三郎自身の手書きで『豊州新聞』とあるのは『豊州新報』の誤り。『大分新聞』記事の日付については大分県立図書館所蔵マイクロフィルム『大分新聞』大正12年7・8月、11・12月に確認した。
- 3 : この時期の『鉄道旅行案内』には鉄道省から刊行されたものの他、鉄道旅行案内編纂所の刊行した同名の書籍が知られている。
- 4 : 大阪-別府間の定期航路の開設は同年7月である。

- 5：『延岡大観』は山口の調査研究の上に成立しており、特に民俗誌的な記述については現在では失われた貴重な習俗を含んでいるのに対し、『新撰 延岡案内』は商工会議所を背景にした豊富な統計を扱っているという違いがある。
- 6：日本窒素肥料が大正12(1922)年に恒富村に建設した延岡工場でアンモニア合成に成功したのを皮切りに、後紆余曲折ありながら昭和5(1930)年には同村にベンベルグ工場(日本ベンベルグ絹糸)、さらに8年には岡富村に旭絹織延岡工場(レーヨン工場)が稼動した。上記3社は合併し旭ベンベルグ絹糸となった後、戦時中の昭和18(1943)年に日窒化学、同21(1946)年に旭化成工業となった(中島1990)。
- 7：金属製シルバーアーケード(通称：銀天)が日本の商店街ではじめて建設されたのは、昭和26年3月の東京都日本橋人形町商店街の片側アーケードで、また全蓋式アーケードは同年10月の北九州市小倉の魚町銀天街商店街である(辻原他1999, p.215~222)。従って延岡市の祇園町銀天街は金属製アーケードとしては当初期のものである。  
延岡市祇園町銀天街の片側アーケードの構築については『延岡新聞』に詳しく掲載されており、それによると同年2月~3月には小倉への視察結果を受けて中小企業振興補助を申請し、5月には工事が行われている。その後7月には道路(当時の国道10号線)東側の一部が完成したが、西側は家屋のセットバックが遅れ最終的には年度末に完成している(『延岡新聞』昭和27年2月27日・3月28日・5月26日・7月4・25・26日・8月29日・10月22日・11月20日の各記事)。
- 8：延岡市鳥瞰図に関する写真ネガは6×9サイズで撮影されており、延岡だけでなく初三郎が鳥瞰図作成に関わった日本各地の様子が記録されている。
- 9：船倉市営住宅「薫風荘」は昭和25年8月30日に起工され、翌年5月9日に竣工している。昭和27年12月の公営住宅一覧表によると、それまで建設されていた木造の公営住宅は床面積が7~11.5坪・家賃が300~870円だったのに比べ、RC造4階建12坪・家賃1,000~13,000円と高価であった(延岡市1951p.6・1952p.4・1953p.15)。当時延岡では建築物として最も高層でもあり、市民にとっては憧れの住宅であった。例えば『延岡新聞』昭和27年8月29日の記事には、「左ウチワで下界ヘイゲイ"何んとも言へんなァ"という見出しで、高層で風通しもよく花火やネオンの夜景を見渡せ、さらに鉄の扉でプライバシーも万全であるという同住宅と、そこに住む人々の様子を記載している。

- 10：一方で近年、ラウンドアバウトの名称でこうしたロータリー交差点が各地に復活しつつある。
- 11：「戦災地復興計画基本方針」(昭和20年12月30日閣議決定)、「戦災復興都市計画の再検討に関する基本方針」(昭和24年6月24日閣議決定)、「戦後復興年計画の促進について」(昭和24年10月4日閣議決定)による。
- 12：ただし工事そのものは遅れ、最終的には昭和32年10月の第2工区換地処分をもって終了している。
- 13：筆者は『延岡市鳥瞰図』を組み込んだスマートフォンアプリ『プラリ、ノベオカ』を平成24(2012)年に作成している。

### 引用・参考文献

- 江川林蔵編著1953「戦災史 五、戦災復興事業」『市政二十年史 延岡市』延岡市役所
- 楠瀬正太郎1951「都市計画基礎調査について」『建設月報』4-10建設広報協議会
- 楠瀬正太郎1952「都市計画基礎調査について」『新都市』6-4都市計画協会
- 建設省編1958「延岡市」『戦災復興誌 第6巻 都市編Ⅲ』都市計画協会
- 辻原万規彦・小林正美・中村泰人・外山義1999「西日本における都市のアーケードの成立および発展過程」『日本建築学会計画系論文集』第524号
- 鉄道省1924『鉄道旅行案内』博文館
- 中島最好1990『延岡動力史』旭化成工業株式会社延岡支社動力部
- 名古屋市博物館2014『名古屋市博物館特別展 NIPPON パノラマ大紀行~吉田初三郎のえがいた大正・昭和~』名古屋市博物館
- 延岡市1949『延岡市勢要覧 昭和24年度版』延岡市
- 延岡市1950『延岡市勢要覧 昭和25年度版』延岡市
- 延岡市1951『事務報告書 昭和25年度』延岡市
- 延岡市1952『延岡市勢要覧 昭和26年度版』延岡市
- 延岡市1952b『事務報告書 昭和26年度』延岡市
- 延岡市1953『事務報告書 昭和27年度』延岡市
- 延岡市教育委員会文化課2006『生誕110周年記念 夢は大空に 空の先駆者 後藤勇吉』延岡市
- 延岡市史編さん委員会1983「第3編 生活環境の整備 第4節 都市計画 二区画整理」『延岡市史』上巻 延岡市
- 原田勝正1993(初版1986)「第3章 鉄道優先時代の交通・運輸 II 鉄道」山本弘文編『交通・運輸の発達と技術革新-歴史的考察-』(第2版) 国際連合大学

平田剛志2012「鉄道省編『鉄道旅行案内』諸版の比較研究」  
『Core Ethics』Vol. 8  
堀田典裕2009『吉田初三郎の鳥瞰図を読む 描かれた近代日本の風景』河出書房新社  
益田啓一郎編2008『平成20年度秋の特別展 美しき九州の旅 - 「大正広重」初三郎がえがくモダン紀行 -』北九州市立自然史・歴史博物館  
益田啓一郎編2009『美しき九州「大正広重」吉田初三郎の世界』海鳥社  
三重野勝人2004「油屋熊八翁の実像を探る」『別府史談』18 別府史談会

宮本啓介・塩伝次郎1926『新撰 大延岡案内』平和印刷所  
山内利秋2013「中心市街地の伝統は継承されるのか - 学生のまちづくり活動を通して -」『九州保健福祉大学研究紀要』14  
山口徳之助1926『延岡大観』大成舎  
湯原公浩編2002『別冊太陽 大正・昭和の鳥瞰図絵師 吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社  
吉田和夫1996『鳥人、後藤勇吉』朝日ソノラマ